

会報「榊葉」第6号

昭和56年6月20日印行

発行者 小林 征男

編集者 吉田 義隆

発行所 津市鳥居町

三重県神社庁内

三重県神道青年会

御挨拶

会長 小林 征男

会員諸兄には、神明奉仕・教化実践に日々御精励御活躍の事と存じます。

扱て現社会情勢は刻一刻と変化しており、我々もまたこれに対処し得る神青会活動の方向方針を考えていくべきであります。

靖国神社国家護持運動について、現在公式参拝実現運動として大きな盛り上りをみせているが、三重県下に於ける公式参拝に関する請願運動は八市四十町九村の市町村議会が採択しており、一方中央に於ても

「みんなで靖国神社を参拝する国会議員の会」が発足し、靖国神社春季例祭には二百余名もの閣僚・議員が参拝している。数年前の情勢とは異なりいよいよ新しい展開の時期が始まったと言えよう。我々は斯界の尖兵として、国旗国家の法制化、建国記念の日奉祝行事の政府主催実現運動等国民精神昂揚運動とも関連しつつ、息の長い強力な支援活動を推進開していかねばならぬと思う。

次に我々活動の一つに、青少年教

化活動がある。国家の大計は教育にあると言われるが如く、重要な課題でもある。現在の学校・家庭・社会

等の教育に戦後教育のあらゆる弊害が発生していると言われるが、中学校暴力、高等学校の集団授業ポイント、家庭内暴力、少年犯罪の激増と日々の新聞テレビのニュースには事欠かぬ有様で、知育が德育に先行し民主主義、個性尊重が拡大されて我儘が横行する、全く無道徳、無秩序の状態と言えよう。我々は青少年対策の一環として、「お宮の子供会」

を開催して来たが、第六回目を伊賀の春日神社境内を拝借して行うべく準備中である。これ等を通じ、あらゆる機会を捉えて青少年を神社の杜に集め御稜威を拝しつ、教化活動を推進していかねばならぬと思う。

一方我々は常に足下を見つめつつ、自己の研鑽を深め、斯道の直面する諸問題に真剣に対処し積極的に行動が出来得る青年神職であらねばならぬであろう。

久方振りて神道青年会の吉田君から電話があった。何かと思つたら、原稿の依頼だとのこと。それは何かの間違ひじゃないのか、自分は三重県神道青年会おそらくはじまつて以来の最も徹底した「何にもセンム」で二年間を通じたのだ、誰か他に適当な人が居るだろうに、などと電話口でやっているうちに、つい「どんな事を書けばいいのか」と聞いてしまった。すると得たりや応とばかり彼曰く、「刀のことで。」

生来の断わりべたがたたつて引受けてから考えた。冗談じゃあねえやわが三重県神道青年会には鯨の研究で一家を成した矢野先輩がいっしやる。自分の刀談議なんて矢野さんに於ける鯨の足許、いやシッポにも及びやしない。

そこで、今回は刀のことは引つ込めておいて、別のことで間に合わせよう。

今、ちよつとしたシルクロード・ブームだという。きっかけは何と言つても、NHKテレビで何回かに亘つて放送された「シルクロードを行く」だろう。あの音楽、あの画面、そして的確な解説、それらがみごとに合つて、すばらしい出来映えであった。私も、本当にひさびさに放送のあるごとに時を忘れて楽しみ

次回を待ちわびたものだ。そして、つくづく感嘆した。流石NHK、他の民放が今どれ丈頑張つても、どうしてこれ程の壮大な番組はつくれない、と。

ところが、この番組が終る頃、興味ある話を耳にした。当のNHKの内部では、「シルクロードを行く」は必ずしも高い評価を得ていないらしい。どうも、あれだけの金と時間をかければ良いものができるのは当然



シルクロード

神原 佑司

然さ、ということのようだった。

まさか、そんな小人ばかりの集団ではあるまいと思うが、少なくとも金と時間をかければあれぐらいすぐれた作品もできるのだ、ということはある。大相撲の実況や、あの紅白歌合戦とやらも成程大いに結構ではあるが、どうでもNHKでなければできぬ、と胸を張る程のものもあるまい。もし誇れるものがあるとすれば、それは今回の「シルクロード

ドを行く」のような企画ではなからうか。それも、たつぷり金と時間というドレッシングをかけて。

番組を見ていて、幾度となくハッとさせられた。現在正倉院の御物として伝えられる品々の中に、シルクロードを通してもたらされたのである。西域のものが多く含まれていることはよく知られている。しかし、シルクロードが我が国の文化に及ぼした影響は、とてもそのみにとど

まるものではない。神道に於てすらシルクロードが歴史に果たした役割から無関係ではあり得なかつたのである。神宮の、二十年毎の式年遷宮に御調進申し上げる御装束神宝も、特に明治以降極めて綿密な考証がなされてきた。ただ、もしも今後なお考証を重ねる必要があるとするならば、その時はまさしくあの東西に延びる一筋の道が、これ迄以上に大きな意義をもつことになるのではな

年長者の板に付きたる言行、態度に慄らずして、徒らに憤慨することとなるは、若き血の気燃えるためである。されど、年長者の行動は洗練された結果として、小壮者とは、最早世界の違うもので、反抗すべきではない。老人は長き生活に疲れ、既に智能衰え感情も消耗したとはいえ、当代の勇者として、実社会生活の功業者である。この意において、敬老の意義が成り立つてくると思う。その体験は尊い経験であり老寄りの冷水と冷笑するは、自分の徳を積む事にはならない。人生の大半を神意に従つて奮闘を遂げ老境に入れば、既に功成り名遂げたことになる。身体のみかなくなるは、天の道であり、必ずしも名をあげるに拘らず、既に老境に入った人等は、総て少壮に委ね後輩を十分伸すことを旨とし、みだりに口喧しく言うばかりでなく、私等は先輩方の体験を警めとするよう長老を敬し、礼讓を以つて接し、多年の榮老を禱るよう心掛けたいものである。これこそ日本の美風の一つであり、家庭に於ても、長幼の序を失はなければ家よく整ひて円満になり、神意に適うものである。

伊勢の、私の寓居に、私の家内から数えて三代許り前の人、江川近情が書いた書や画がある。そして又、それらの書画に用いられた落款等の印章も漆塗りの箱に納めて残されている。最近、それらの目録を、思い立って整理してみた七十数種、その印材は、木や角もあるが、本人の好みであろう、とりわけ多いのがやわらかな色つやをもつ玉であった。それも、一つの印材を生かして両面に刻されたものが多く、それらの中に、鳥目の形をした中に「貧乏名家」と酒脱な字を刻った面白いものもある通り、明治の改革で多分に洩れず左前になっていたためでもあろうか、そうでなくとも大きな玉の印材などは仲々得難いものであつたのだらう。

「シルクロードを行く」の何回目かの放送で、天山山脈のふもとを流れる川で玉を拾つて生活を送る貧しい人々の様子が描かれていた。古来王侯貴族の心を捉えてやまなかつた玉。文人墨客が愛しんだ玉。我家に残る玉の印章も、あるいは天山の雪どけ水がせせらぐ川から拾われて、ラクダの背にゆられてシルクロードを東に運ばれてきたのではないだろうか。

(神宮宮掌)

神職のつとめ

館 昭房

近頃、社頭奉仕をしておりますと実にいろんな悩み事をもつた方々が相談に見え、そして祈禱を受けていられるようになりました。このことは高度成長によつて物質的なことは満たされたものの、その反面精神的なものが忘れられようとしている今日の世相の一端を物語っているように思われます。たとえ苦しい時の神だのみではあつても、神社に訪れるのは、そこには、「なにか目に見えない力がある」と思うからでありましょう。こうした時こそ神社が精神のよりどころとされ、神職が指導的立場に立つて人間の本来の姿、人間の回復に努めなければならぬのではないのでしょうか。

幸いにして最近の時代風潮は、物質的な豊かさより精神的なるものを求めるようになってきました。古くからの精神をつぎ、祭祀や行事をつぎ、古いものを一つも変えないで伝えようとする神社神道こそ人間性の回復につながるものと思ひます。神社と人々とのつながりをより強固なもの

長幼の序ありて

家整ふ

瀬尾 好弘

幼きは愛し、長老は敬う。一年の長あれば一年だけ経験が豊富でありましてや先輩をや。人情の機微に触れ、世故を通じ、常識も又若者より優れ事務にも、技術にも、実際に当ることの多いだけ、新米の及びも付かぬ所である。学校にて学び、読書をして知識とはなるも実社会には、直に役立たず。見習という事も実修を払うべきものなり。小壮の間は、

に、先輩の奉仕した遺業を継承し、これを後輩にゆずる中で信仰の心を育てることが、現在われわれ神職のなすべき課題ではないでしょうか。

「平常心、これ道」という諺があります。平常心とは人間が生まれて死ぬまで、平常堅持しておかねばならない心懸けのことです。このように時局が難しい方向にある今日こそ、社人としては神明奉仕をふまえた立場で、常に平常心を養うことにつとめ、社会的に挺身しなければならぬと思ひます。

(洲崎浜宮神明神社権柄直)

神道青年として

思う

山中 理

近年宗教活動が良きにつけ悪しきにつけ活発化して来たように思う。その中で特に印象に残つたのが、本年二月末のローマ法皇の来日と、四月末の、ノーベル平和賞受賞者マザー・テレサの来日であった。日本人の中でクリスチャンはごく僅かのようであるが、テレビや新聞で報導されたローマ法皇の「平和の巡礼」に関心をもつた人はかなりの数にのぼつたようである。「法皇は雪と寒波をおみやげに持つて来た。」と言われるが、その寒波の中の長崎訪問は非常に感銘深かつた。あまりの寒さに耐え切れず倒れた人が数百名にものぼつたが、その寒波の中で法皇をお迎えする信徒のひたむきな姿は、宗派を問わず人々の胸に深く刻み込まれたものであつた。又、法皇来日の感動に拍車をかけるごとく、四月末には、マザー・テレサが来日した。彼女は日本各地で、神の愛と、奉仕の精神を説き、一連の貧民救済運動を展開した。日本は諸外国に比べ、非常に豊かで、かつ安全である。彼



(多度神社権柄直)

女の呼びかけに対して重要性を感じたのはごく一部の人間だけのような感じがした。しかし、彼女が日本に対して、「物質的には豊かでも、家庭の貧困を招いている」と、又「貧困とは飢えてではなく、人と人との精神的豊かさが欠けている事である」と述べた言葉に、誰しもが、あらためて考えさせられたはずである。正にマトを得た言葉であった。我々がわかってはいても、これといった運動も展開する事が出来ず、又、口に出したところで、それ程緊迫感を感じなかつたのでは無いだろうか、ところが外部から指摘されるとその気になつてくる。日本人の悪い癖であるように思う。同時に、のんびりしていた自分を恥ずかしく思う。

二人のクリスチャンの老人が日本人の心に訴えたもの、これは、我々神道青年が為さなければならなかつた事ではなかつただろうか。マザー・テレサは帰国後さつそく四人のシスターを日本へ派遣して活動を展開している。今や重要な社会の変革期にある。我々は、真の「豊かな社会づくり」の為に、神道青年としての英知と行動力を結集して立たねばならない。日本の平和は神道にある事を確信し、世界の模範は日本が示す事を目指して……。

(野辺野神社役員)

私の体験



馬場 明德

私は学校を卒業するや富士山本宮浅間神社に奉職した。富士山本宮浅間神社と言え富士山を御神体とした神体山信仰の神社であることは言うまでもない。そのころのことを思い浮べてペンを走らせることにした。この奉職中に始めて富士の素晴らしさ、恐ろしさを味わうことになる。「富士は登るものではなく下界から眺めるものである」と登山家は言うが、頂上からの眺めはまたすばらしい、やはり日本一である。頂上に開山中二ヶ月余り生活していると色々と富士の変化を味わうことができる。生活の面から見ると、夏であるが真冬の生活である。冬の服装をし囲炉裏を囲んでの生活である。起床といえは御来光前に起きるのである。時刻でいえば午前三時から四時ごろである。そんな厳しい反面下界と殆どかわらない面もある。水道を捻れば水がでる。食事の準備はプロパンが使える。御飯は高圧釜で炊くので天下一品おいしい。新聞は午前十一時頃にはその日のものが見られるの

である。勿論風呂もあるのである。これからの体験は一日や二日の登山では味わえないものである。頂上から下界を眺めた時地図を広げたように美しく素晴らしい、まるで夢を見ているように感じさせる。それが一番美しく見ることにできるのは台風の前である。前後は素晴らしく美しいのであるが、台風が九州に近づけば暴風雨で、これが北海道に抜けていくまでであるからこまりものである。長い時には一週間ぐらい一歩も外へ出られないのである。また雷は「富士山」という唱歌で歌われているように「頭を雲の上に出し……雷さまを下に聞く……」と雷はピカッと光つたらしばらくして音であるが、頂上では光ると同時にドンである。あたりの金属という金属はピカピカと光りつめである。そして毛という毛は立つのである。そして一番多く登山者が体験するのは落石である。富士山の石は溶岩でできているので安定性がなく少し触れるだけで落石し、小さいのが落石しただけ

で下へ下へいく間にひとつがふたつになり数が増していくのである。私も登山中何度も体験したことがある。ある時故意に石を落とす登山者がいて、それが団体の登山者に当り死亡するという事故もあり、山小屋の人たちと運んだこともあった。息があればヘリコプターも来てくれるのであるが、死亡したとなると山小屋の人等と協力して運ばなければならぬのである。この富士での体験というのはまだまだ書き切れない程沢山ありますが、この辺でペンを置くことにします。

機会があれば神青会全員で登ってみたいと思っています。
(三重県神社庁録事)

「お宮の子供会」開催のお知らせ

第六回お宮の子供会は左記日程で開催されます。会員各位は氏子の子供さんに参加をお勧め下さい。

また期間中の御奉仕も御協力をお願い致します。

尚、詳細については近日中に開催要項を配布致します。

- 記
一、日程 八月二日、四日(二泊三日)
一、場所 阿山郡伊賀町川東春日神社(神田信忠宮司)

神青協臨時総会並に中央研修会に出席して

副会長 富永主税

去る三月七・八日、坊ちゃん町の町松山市(道後温泉)において臨時総会並びに中央研修会が開催された。本県より伊藤常任理事を始め五名出席し会に臨んだ。

臨時総会では昭和五十四年度の各会計決算が上程され、原案通り可決されたが特に本総会の主案であった神青協会則一部改正の件についてご報告します。

常任理事・若干名、理事・十名であった役員を理事十七名とし、理事は会務を執行し、地区選出理事は地区を代表して地区との連絡にあたる」と明記され、また理事の選出方法においても留意され改正された点、会計年度を七月一日始まりを四月一日より始まり翌年三月末日で終ると定められた点が主な改正の内容である。前会則にては各理事の職務分担が明確でなかつたため、ややもすれば各地区との連絡また職務のスムーズさに欠けたが、それらの欠点不備を

改めるよう着眼し改正され大きな拍手をもって賛同した。

中央研修会においては長曾我部地元愛姫県会長開会の挨拶に始まり、テーマである「神道と稲」その現代社会への展開」に添って、早速二時十分より第一講演「日本の哲学」久枝浩平先生が、引き続き三時四十分より第二講演「労働と神道」石井寿夫先生がなされ、さすがに全国より参集した優者ぞろいでの質疑応答の時間を取る」と進行役の羽中田副会長は時計にとらめつけする姿も見える程活発に講師先生に質問し、予定日程を若干過ぎて一日目の研修を終えた。

二日目、八時三十分より全体会が、引き続き第三講演「神道と稲」その現代的展開」三橋健先生がなされた。閉会式では神道青年の歌大合唱ののち、来年は本研修会が北海道札幌の地で開催予定と聞き、早くも再会を約する優者もいた。

(志氏神社宮司)

昭和五十五年事業報告

昭和五十五年

- 七月 五日 定例総会 於三重県神社庁
- 七月 十一日 会計予算決算活動方針並事業計画案協議 於三重県神社庁
- 七月 二十九日 東海五県神青協連絡協議会教化研修会実行委員会 於三重県神社庁
- 八月 八日 「お宮の子供会」開催 於二見興玉神社
- 八月 八日 「お宮の子供会」反省 五県教化研修会等協議 於三重県護国神社
- 八月 二十八日 東海五県神青協連絡協議会教化研修会開催 於三重県神社庁並びに津クリンホテル
- 八月 二十九日 講演「日本をとりまく国際情勢」 於三重県護国神社
- 九月 二十日 上野市・阿山郡合同観月会 於阿山郡大山田村
- 九月 三十日 中森役員 事務局長出席 中央公民館
- 十月 三十一日 三重県神社関係者大会奉仕 於神宮会館
- 十月 三十一日 会員多数奉仕 小海途尚氏
- 十月 三十一日 指定団体功勞者表彰 小海途尚氏
- 十月 三十一日 神青通信第三号発刊

昭和五十六年

- 一月 二十六日 役員会 於三重県神社庁
- 三月 七日 神青協臨時総会、中央研修会、三重県護国神社合祀奉仕等協議 於松山市「ホテル葛城」
- 三月 八日 神青協中央研修会 於松山市「ホテル葛城」
- 三月 十八日 富永副会長外五名参加
- 三月 十九日 第一回県外研修会 北陸方面
- 三月 二十二日 尾山神社白山比咩神社参拝 十四名参加
- 三月 二十五日 三重県護国神社合祀祭 八名奉仕
- 四月 十七日 東海五県神青協連絡協議会 於三重県護国神社
- 四月 十七日 役員会 於三重県神社庁
- 五月 三十日 親善ソフトボール大会 会長他三名 於阿山郡春日神社
- 六月 四日 お宮の子供会打合せ会 三十名参加 於津北部野球場
- 六月 四日 親善ソフトボール大会 三十名参加 於津北部野球場

神青研修旅行に参加して

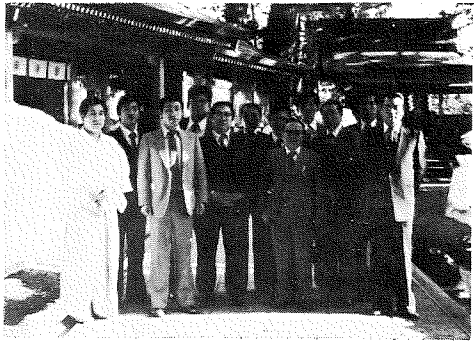


宮崎 至功



去る三月に実施されました北陸方面の研修旅行に参加させていただきました。その報告を兼ね感想を書いてみます。十八日午前九時、小林会長以下会員十三名と、特別に参加をお願いした元会長神田信忠氏と総勢十四名で出発しました。

デラックスタイプのバスで、疲れもなく楽しく談笑している間に、午後二時最初の目的地である金沢市の尾山神社に到着しました。有名な神門をくぐると境内には山のように雪



が積まれており、いよいよ北陸に来たんだという実感がわいてきました。予め馬場事務局長から連絡してもらっていたお陰で、早速拝殿に案内され正式参拝をさせていただきましたが、その際楠木宮司様が八十四歳という御高齢の上、おかげが悪いにも拘らずわざわざお出まじました。御挨拶と御説明をいただいたのは恐縮しました。

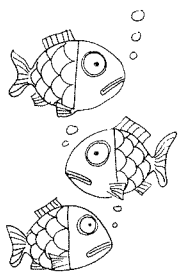
再びバスに乗り、加賀一の宮白山比咩神社に予定通り午後三時三十分に着。正式参拝の後、白山信仰について講話を拝聴しました。古くより「白山さん」の名で親しまれてきた白山比咩神社は、全国二千七百余社の白山神社の総本社とのこと。さすがに立派な御社でした。残念乍ら時期的にも奥の宮の参拝は不可能でしたが、雄大な自然を対象に起った信仰は理屈抜きの特異の重みを感じました。是非一度奥の宮の参拝をしたいと思えます。見上げる程の雪の壁の参道で、職員の方々の見送りを受け、宿泊先の山代温泉に向い

山代温泉での懇親会は終始なごやかに、「裸どうしの付き合ひ」とか「膝を交える」とか言いますが、その言葉通り全員楽しく夜の更けるのも忘れて語り合いました。私は少し飲みすぎたのがタマにきずりましたが、二日目の目的地永平寺に着いたのが午前十時。御承知の通り道元禪師を開山として建立された曹洞宗の大本山です。私は以前から永平寺に親しみを持っていました。といまますのは道元禪師の父久我通親は、村上天皇第七皇子の孫であり、その第七皇子具平親王を祖とする北畠家とは同族になるからです。建立以来七百年余変わることのない厳しい戒律の中で衆僧等は修行を重ねています。近年の観光ブームにより人々が多く押し寄せ、エレベーター等施設の近代化を余儀なくされていますが、しかしその厳しい精神と境内の壮麗な雰囲気は、往古とさして変わらず伝えられています。次から次へと観光バスでやって来る人々を見てると、あわただしい社会の中で流されるままに騒々しく毎日を送っている現代人には、特にこの様な雰囲気引かれ、憧れるのも無理のないことだと思えました。鎮守の森に於ても、静かに自分を見つめる場所と機会を人々に提供することが一つの役目だと思います。

想い出すままに、まとまりのない文章を書きましたが、最後にこの旅行について何かと御苦労をおかけしました執行部の皆さまに深く感謝申し上げます。
(北畠神社 林宜)

第三回親善ソフトボール大会開催

去る六月四日、津市北部球場において第三回親善ソフトボール大会が開催された。当日は巫女さんを含めた総勢四十名が参加、午後一時、小林会長挨拶、試合方法等について村田理事の説明の後開始された。今回はあいにく神宮チームが不参加のため、北勢・中勢・南勢の三チームに分かれ、五回戦三試合の熱戦が展開された。日ごろ緋袴姿の巫女さんもおこの日はかりはトレーニング姿で大ハッスル。試合は終始なごやかに進められ午後五時終了、その後神社庁舎にて懇親会がもたれた。



新入会員紹介

中野泰志

(二十四才)

生年月日 昭和三十一年八月二十五日
奉務神社 神宮出仕
住 所 伊勢市中村町七四〇一
趣 味 無線

工藤和義

(二十二才)

生年月日 昭和三十三年九月十日
奉務神社 神宮出仕
住 所 伊勢市中村町桜ヶ丘二九
趣 味 音楽鑑賞

渡辺修

(二十五才)

生年月日 昭和三十年十月六日
奉務神社 神宮出仕
住 所 伊勢市中村町桜ヶ丘二九
趣 味 音楽鑑賞

中田吉彦

(二十二才)

生年月日 昭和三十三年八月二十五日
奉務神社 神宮出仕
住 所 伊勢市中村町桜ヶ丘二九
趣 味 テレビ鑑賞

磯部豊三郎

(二十四才)

生年月日 昭和三十三年二月十二日
奉務神社 神宮出仕
住 所 伊勢市中村町桜ヶ丘二九
趣 味 音楽鑑賞

宇佐美秀臣

(二十二才)

生年月日 昭和三十三年八月二十四日
奉務神社 猿田彦神社出仕
住 所 伊勢市宇治中之切町二二
趣 味 車

伊東一彦

(二十二才)

生年月日 昭和三十三年八月二十日
奉務神社 椿大神社出仕
住 所 鈴鹿市山本町一八七一
趣 味 旅行・映画・ギター

真弓盛保

(三十三才)

生年月日 昭和二十二年八月二十二日
奉務神社 神館飯野高市神社権禰宜
住 所 鈴鹿市伊船町一一〇
趣 味 読書

菅原康知

(二十三才)

生年月日 昭和三十三年四月十日
奉務神社 猿田彦神社出仕
住 所 松阪市小阿坂町二二二
趣 味 囲碁・詩吟

近藤光寿

(二十才)

生年月日 昭和三十五年九月七日
奉務神社 椿大神社出仕
住 所 鈴鹿市山本町一八七一
趣 味 スポーツ

川口浩之

(二十二才)

生年月日 昭和三十三年八月二十四日
奉務神社 猿田彦神社出仕
住 所 伊勢市川端町三七〇一
趣 味 旅行

塚原徳生

(二十六才)

生年月日 昭和三十年六月八日
奉務神社 多度神社権禰宜
住 所 桑名郡多度町多度
趣 味 レコード鑑賞

稲垣年

(三十才)

生年月日 昭和二十六年五月十七日
奉務神社 椿大神社出仕
住 所 津市八町三丁目八一六
趣 味 旅行

辰守弘

(二十八才)

生年月日 昭和二十八年五月二十一日
奉務神社 多度神社権禰宜
住 所 桑名郡多度町多度一六八
趣 味 読書

三重の神社巡り ①

神館神社

鎮座地 桑名市大字江場神戸
御祭神 天照皇大神・豊受姫大神・倭姫命

神紋 三つ色
建物 本殿神明造六坪

境内 八六〇坪
境内社 一社

社宝 獅子頭(二頭・県文)・刀

氏子 五〇〇戸
宮司 冷泉甫

由緒 神館「コウダツジンジャ」
は、古くは伊勢神宮の御領で桑名神戸の御館神明社であり、神宮とは極めて深き御縁故を有する神社である。

又桑名神戸は本神戸でもあり、垂仁天皇の御宇皇女倭姫命が大御神の鎮まり坐さむ大宮地を求めて各地を巡り坐しし時、桑名の野代の宮に於て伊勢国造の遠祖建夷方が進め奉りし所である。

当神社の例祭は十月十三日であるが、この日には国の無形文化財になった伊勢大々神楽も御神前に奉納され、一般の人々には同日午後一時よ

り三時頃まで見て頂くことができる。又特殊神事に神衣(オンゾ)祭があり、十二月十五日には氏子内の旧家にて御神衣が調進され、当社の神殿へ奉納される。



表紙写真説明

御神宝
能面 市指定文化財
名張市平尾町三三一九

宇流富志禰神社所蔵

当神社は市街の南東部、名張川北岸の台地上にある。主祭神に宇奈根大神をお祀りし、「三代実録」によると、貞観十五年從五位に昇神した国史現在社である。社伝には、主祭神は神武建国の初め、一國の瑞穂を祈願するために祭祀されたと伝えられている。永徳元年に神階從一位に進むとあり、近世には名張藤堂家の崇敬社になっていた。古くから名張の産土神として氏子を始め市内の人たちの尊崇を集めている。

当社に保存されている四十四面の能面・狂言面は室町期の古いものもあるが、大半は江戸期のものが多い。これだけ多数の面が一ヶ所に保存されているのは県下でも数少ない。能は大正末期頃まで氏子の手によって続けられていたらしいが、現在は行われていない。写真の能面は「朝倉尉」と言い、越前和泉椽の作で桃山時代のもの。和泉椽の面は現在のところ、この面を含めて全国に三面しか残っていないという貴重なものである。

会員ニュース

昭和五十五年

〇十一月二十三日 椿大神社権禰宜 秦友安君結婚。新婦咲子さん。

昭和五十六年

〇四月二十五日 木本神社宮司田中 安弘君結婚。新婦泉さん。

〇四月二十九日 耳常神社宮司増田 秀樹君結婚。新婦高子さん。

〇五月三十一日 椿大神社権禰宜 宇 佐美由男君結婚。新婦喜咲子さん。

〇八月?日 宇流富志禰神社宮司中 森孝栄君第二子誕生予定。

編集後記

会報第六号をお届けします。

編集不慣れで大変遅れておりましたことを、深くお詫び申し上げます。編集部では、より多くの会員諸兄に投稿いただくことを願っております。随筆、随想、会に対する意見・提案、論評、研究報告、文芸作品などの原稿をお寄せ下さい。

来月から新年度がスタートします。役員も改選されて、新しい体制で会の活動が始まろうとしています。会員諸兄の一層の御協力をお願い致します。